



「茨城大学」学

大学教育センター長 森野 浩



諸君は前学期と長い夏休みを過ごして大学生活に慣れたことと思います。大学のカリキュラムの仕組み、授業や定期試験の様子も理解されたでしょう。4年間のおおよその学習プランのもとで無理のない後学期の履修をしてください。ところで、1年生の諸君は多くの教養科目を受講されたと思います。その中で、眼を引き、特に興味を持った科目はあったでしょうか。大学によっては、個性的な授業科目を立て、独自性を出しているところが少なくありません。特に、地方国立大学ではその傾向が強くあります。例えば、琉球大学ではその地理的な特異性を教育に生かすべく、沖縄に関する自然・文化・社会の総合的な科目を立てています。茨城大学でも同様な観点から、教養科目として総合学としての「茨城学」を用意し、その履修を同窓生の一つのアイデンティティにする試みも検討に値することでしょう。

さて、その前に、自分たちの茨城大学について、その成り立ちや60年の歴史について知っておくことは茨大生として必要ではないでしょうか。なぜ、茨城大学は複数のキャンパスに別れているのでしょうか。ご存知の学生さんは少ないでしょう。終戦後にそれまでの各地方の専門学校、高等学校、教員養成学校（師範学校）、などがそれぞれで統合され、多くの新しい総合大学が各地方にできました。それを推進したのは、アメリカ教育施設団による日本の教育改革の勧告によります。明治の初めにできた日本の最初の総合大学（東京大学）以来、日本の大学は国家権力との結びつきや専門教育志向が強く、自立性が弱かったのです。

これに対して戦後日本の健全な将来を考えてのことだと思いますが、使節団は大学の開放と増設、一般教育の拡充の必要性を痛感し、上記の新制の総合大学の設立を進めました。同使節団の教育改革勧告では、大学の任務は、自由な思想、大胆な探求、民衆のための希望ある行動の模範を示すこと、とされています。茨城大学の創設は1949年5月で、水戸高校、茨城（青年）師範学校、多賀工業専門学校が統合されました。その3年後に県立農科大学が一緒になり、現在の5学部体制が整いました。茨城高校と師範学校は水戸にあり、多賀高専は日立、農科大学は阿見でしたので、それ以来の分離キャンパスというわけです。他の多くの地方国立大学と同様にこのような歴史と背景の上でできた教育機関ですが、アメリカ使節団の高い理想は、必ずしも我々の実利中心的教育観に浸透してきたとはいえないようです。

ローザ・プルムラ
第39号

(平成21年度10月発行)

目次

「茨城大学」学	1
大学教育センターから	2
平成20年度推奨授業表彰	3
特集・「平成20年度推奨授業表彰インタビュー」	4
お知らせ・学生の声	8

学園生活を楽しみ、勉強しなさい

佐藤和夫（大学教育センター副センター長）

入学して半年経って、大学にも随分と慣れてきたことだろう¹。もしかすると慣れすぎてだれてきているかもしれない。そんなときは別な視点からこの学園を眺めてみるとよい。当たり前のように見えるものが、実はそうでもないのだ。

まずは正門。立派な御影石造りで、大学創立期以来のものである。伝統と歴史を感じ取ってほしい。中へ入って左手に折れれば、大きな銀杏の木が見える。学園の成長とともに歩んできた。旧陸軍の兵舎の跡に立つ我が大学では古強者というにふさわしい風格を備えている。

さらに右に折れると学生センターの入り口が見えてくる。白っばけていて、違和感がある、と悪口を言う人もいる。私もそうだった。そんなに広くもないが、入れば中はほとんど空っぽで、密かにLR²などと呼んだものだ。しかし花嫁の白無垢にも似て、大学生活をどのような色に染め、中身をどう充実させるかは、なんとと言っても学生諸君の働きかけ次第にかかっていることを示唆しているのだ、と受けとめることもできるだろう。

学生センターの入り口を抜けると、近頃整備された「ライト・コート」がある。建物に囲まれた光降り注ぐ場所なので、こう名づけられたのだろうが、できれば

このような軽い名前ではなく、ドイツ語とフランス語を折衷して「ホーフ・カフェ」と呼びたいところだ。「ホーフ」はドイツ語で「中庭」、文脈次第では「宮廷」の意味さえある。「カフェ」に説明はいらないだろう。ここにはパラソル付きのテーブルといすが用意され、自動販売機まであって喉の渇きを癒してくれるし、談笑もできる。このようなしゃれた所は茨城大学広しと言えども、ここしかない。大いに利用してほしい。

実はつい先日まで学生センターの入り口には大学へ入った人のためにもっとふさわしい、ややデフォルメした石造りの人物像が置かれていた。この像はどこか、ヨーロッパ人文主義の大碩学、エラスムス先生を思わせた。先生は中世には抑圧されていたギリシア、ローマの学問を復活させた偉い学者であるだけでなく、それをわかりやすく学生に教えることもできた優れた教育者でもあったのだ。これ以上ここにふさわしいものはないと思っていたのだが、別なところへお移りになってしまった³。

「われらの学園」が大学生活を楽しみ、勉強するのにふさわしい場所であることが少しはわかっていただけだろうか。さていよいよ後学期。大学が専門学校と違うのは幅広く教養科目が学べるからである。しっかりと勉強して、充実した日々を送ってほしい。



（「エラスムス先生」、ホルバイン画）「似ている!？」

1 この文章は1年生を想定して書いた。
2 ドイツ語の“leerer Raum”（空虚な空間）の頭文字
3 現在は教育学部B棟脇におられる。作者名もタイトルもそこでわかるかもしれない。「エラスムス先生」はベビー・サークルに入れられたみたいでやや寂しげに見える。

平成20年度推奨授業表彰

推奨授業表彰制度は、前学期及び後学期毎における教養科目の中から推奨授業を選定し、担当教員を表彰することによって、授業の質的向上を図ることを目的に、2001年度に制定されました。

推奨授業は、専任教員及び非常勤講師が担当するすべての正課授業を対象とし、「推奨授業表彰候補者推薦書」、「学生による授業評価」、「当該授業の成績評価」、「シラバス」、「表彰候補者の面接」など教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価し選定されます。

平成20年度推奨授業には、次の3つの授業が選定されました。

● 身近な化学「化学と環境と生活」

松川 覚 先生 (教育学部)

授業概要：我々の生活の中には様々な化学が潜んでいます。もちろん環境問題の中にも多くの化学が存在します。したがって、「化学」を学ぶことは我々の生活を豊かにしたり心を豊かにしたりすることの助けになるといえます。本講義では、化学の基本、身近な化学について様々な演示教材を用いながら分かりやすい授業をおこないます。一部「サイエンスショー」形式でもおこないます。化学が苦手な人もどうぞ!!お楽しみに!!

● 総合英語「学術用英語」

竝木 崇康 先生 (教育学部)

授業概要：講読、正誤問題、文の完成、イディオム、語彙の問題などを扱う教科書を使います。前半は英文を正確に読むための基本として和訳や文法的な説明に力を入れ、次に英文の要約をするようにして、最後は要約による理解をもとにして、著者の主張に対して自分はどうか考えるか、という態度を身につけるきっかけにします。

● 情報処理概論

原田 隆郎 先生 (工学部)

授業概要：前半は汎用的に用いられているネットワーク関連ソフト、文章作成および表計算ソフト、プレゼンテーション用ソフトを利用し、情報の収集・整理・利用方法、文章作成・表計算・表現技術を学びます。後半は「茨城大学のホットスポット調査」という課題を通して、前半の授業で学習した情報関連技術の応用について学習します。

*授業概要は平成20年度教養科目シラバスより抜粋



平成20年度推奨授業の表彰式 (H21.6.10 学長室において)
一番左から原田隆郎先生、竝木崇康先生、松川覚先生、池田学長、森野センター長、
佐藤副センター長、勝本副センター長)

平成20年度推奨授業表彰を受けられた松川 覚先生(教育学部)、竝木崇康先生(教育学部)、原田隆郎先生(工学部)にお話をうかがいました。各先生が授業に注がれている熱い情熱とメッセージを感じてください。

松川 覚先生(教育学部)

「身近な化学(化学と環境と生活)」

受賞に関するご感想を教えてください。

率直に言いますとうれしいですね。ちょうど教養の分野別自然を引き受けて6年目になりますが、6年間より良い授業をやるうとしてきた努力が認められたという点で嬉しいです。



受賞された身近な化学とはどういう授業なのか？

人文学部と教育学部向けの授業でありまして、受講者の多くの学生は化学を得意としていない、あるいはそれほど強い興味を持っているとはいえない学生だと思っています。

そのような学生を対象に、身の回りにある身近な化学現象を実感してもらい、さらにその現象が高校までに習った知識を活かして、こんな風に解釈できるんだということをやっています。また近年問題になっている環境問題に関しても化学とのつながりについて理解してもらうようなことを目指しています。

おそらく今後、受講学生の多くは授業という形で自然科学を学ぶということは残念ながらないわけですが、何かの機会に「あっそうだ教養の時間にあんなことを学んだなあ」ということを思い出して、知識としてちょっとでも役に立てばということを目指しています。

「サイエンスショー」というものを行っているそうですが、

いくら板書して、そして説明をしても理解してもらえないことはよくあると思います。そこで学生が自分の目で見て実感することを重視し、ここ数年、様々な教材を工夫しています。今では、毎回の授業で何らかの演示実験を行っています。化学現象に対し学生の目を引き付ける、もしくは気持ちを引き寄せるといった点でも、演示実験の役割は大きいと考えています。

例えばこんな感じです。(炎色反応の実験の実演、目の前に大きな音とともに赤い炎が広がりました

(驚)。) これは小規模でもできるのですが、大人数授業でやる時には大きく見せることによって、大きなインパクトを学生に与えることができます。こういった演示実験は大学の授業ではあまりないのですが、小中学校の義務教育では当たり前なんですね。実験して実感して理解する。大学の授業でもそのような授業形式があってよいと思います。

またこれは今後の課題になるのですが、現在は私が実際に演じて実感してもらうわけですが、学生一人一人が実験するというのも考えています。目で見ても実感してもらうから、実際に手を動かしてもらって実感してもらうようにしたいのです。

学生から非常に高いアンケート評価を受けておられますが、先生ご自身はどんな所が学生に一番評価されたとお感じでしょうか？

これは非常に気をつけているところなのですが、あくまでも授業というのは教員と学生の両方がいてこそ成り立つので、一緒に授業を作り上げていくという気持ちが必要です。授業は教員の物ではなく学生のもの、当たり前なのですがこれを常に念頭において毎回の授業で完全燃焼できるようにがんばっています。

また、私は大道芸、ストリートパフォーマンスを見るのが好きなのですが、そういうのを見ると、やっている芸というのは、ほとんどみなさん同じ芸なのですね。でも思わずひきつけられ、楽しく見られるものもあれば、そうでないものもあります。まったく同じではないですが、授業でも如何に学生を引き付け

るか？これも大事だと思います。私の場合はそれがサイエンスショーであったり、物事を若干擬人化して教えるような授業方法であったりします。時には笑いをとるようなトークもします。どんなよい内容を授業で伝えてもそれを聞いてもらえなければ意味がないわけですから。

また、ストリートパフォーマーは“For you”の気持ち、観客あつての自分という心構えが大事だとよく言います。“For you”の気持ち、まさにそういったところ見習わなければならないと思いながら、授業を行っています。

なおかつなるべくわかりやすく説明することも重視しています。その一環として毎週授業アンケートをし、わからないところを聞き、それについてのフォ

ローも次の授業でしています。授業アンケートでは面白いメッセージを書いてくれる学生さんもいて、そういうのを読むのも楽しみにしています。

最後に学生へのメッセージをお願いします。

特に教養科目というのは自分の専門科目とは異なったことを学ぶ機会になるとは思いますが、授業を受け勉強したわけですので、そこで学んだことをそれっきりにしなくて、そのあと何か機会があったときには思い出したりとか、忘れないようにして心掛けてください。例えば、私の授業でいえば、化学に少しでも興味を持ち続け、ある身近な現象に触れた時に、そういえばこんな化学的な仕組みを学習したなあというのを思い出していただければいいと思います。

竝木 崇康 (なみきたかやす) 先生 (教育学部)

「総合英語 (学術用英語)」

受賞に関するご感想を教えてください。

思いがけなかったことなので、半分驚いて半分嬉しかったというところですね。

この授業の中では、リーディングを取り上げています。特に、批判的に読めるようにということを心がけています。私は言語学が専門で、決してリーディングや英語スキルの専門家ではないので、ある方法論に基づいてというよりは、大学生だったらこういう基本的な読み方から徐々に進んで、最終的にはある程度批判的に読めるようにと。そういうようなことを自己流でやってきたものをお認めいただいたということです。だからそういう意味では驚いたところもあり、かつ非常に嬉しかったということです。

受賞された学術用英語とはどういう授業なのかもう少し詳しく教えていただけますか？

総合英語の中でも学術用英語というのは、4技能の総合的なレベルアップを目指したレベル別授業の方ではなくて、レベル3を修了した学生が今度はリーディング、あるいはディスカッションなど専門教育への接続を目指し、特定の能力のレベルアップをめざし履修する授業です。

ですから私が気をつけているのは4技能のことはすでにある程度やったのだけれども、できれば今後いろいろなものを読んでいく、特にある程度専門的なものを読むときに、どういうことに気をつけて読んでいく



かということ、いっぺんにやるのではなくて、段階的にやっていこうということです。

最初は文ごとに和訳をしていくことが基本です。そこからある程度きちんと文の構造というものを理解して訳ができるようになったら、今度は段落ごとに要約をしていき、最終的には自分が読んでいる文章全体を理解するだけでなく、その主張はどの程度確かなのか、あるいはどういう根拠をあげていっているのか、自分に対してどう思うかということ、ある程度考えられるようなきっかけを与えられればよいと考えられています。

学生から非常に高いアンケート評価を受けておられますが、先生ご自身はどんな所が学生に一番評価されたとお感じでしょうか？

私自身の感じとしては、英語の勉強は面白いと思った学生がかなり多かったという印象です。「今まで嫌いだったのだけど、この授業を受けて英語が好きになった。」というアンケートの自由記述もありました。教科書を教えるだけだったらそうはいかないのです

が、教科書以外にもいろいろなことをやるので、それも含めて英語の勉強は面白いという具合に思ってくれたのではないかと思います。

“Useful Expressions”というものを授業毎に行っているのですが、

毎回教科書に入る前に、1つのトピックを決めてやっています。それは教科書の内容とは必ずしも一致しませんが、現代のアメリカではよく日常的に使われるけれど、意外と日本では知られていない表現を取り上げています。それはどういう場面でどのように使うかとか、文法的にはどういう特徴があるのかとか、まず授業の最初にそれをやって、学生がいきなり授業に入るのではなく、その前の肩慣らし、学習への前向きなきっかけづくりみたいな感じでやっています。

例えばどんな感じでしょう？

最初にアメリカに留学した時の経験で、これは文化面でちょっと日本とは違うなと実感したことがありました。具体的な例をあげると、買い物をしてお金を払うときに“Would you like a bag?”と店員が聞くのですが、日本人の普通の学生にとってはbagといえばカバンなんですね。ところが辞典を引いてみると、まず基本的な意味で一番目に「袋」とあって次に「カバン」とあります。そうすると日本と違って、買えば必ずサービスとして袋に入れてくれるのではなくて、「袋にお入れしましょうか。」とこちらの意向を聞く、そういうことがアメリカでよくあるということに気がきました。そういう時の答え方は“Yes, please.”あるいは“No, thank you.”となります。私たちが中学校で習う文法だと、例えば“Do you…?”で聞かれたら、“Yes, I do.”とか“No, I don't.”と答えます。同じように考えると、“Would you like …?”であれば“Yes, I would.”とか“No, I wouldn't.”という答えになりそう

なのにそうなりません。それはなぜかというと、形の上では疑問文なんだけど、本当は「良かったら袋に入れますよ。」というある種の申し出なんです。そう考えると“Yes, please.”(はい、お願いします)や“No, thank you.”(いいえ、結構です)という答えが返ってくるという理由もわかります。実際、授業で聞いてみると大抵みんな「かばんはいかがですか」となり、「ではどこでどういう場面で使うと思いますか」と聞くと、「デパートのカバン売り場」という具合にどうしても答えがちです。けどど実は“bag”には「袋」という意味があって、お店で買い物をした時にこうやって使うんだよ、という話をすると、「あー」っていう反応をする人が多いんです。これはほんの一例ですが、外国に出たことがないと、簡単そうで意外とわからないことがあるんですね。

最後に学生へのメッセージをお願いします。

すべての授業では無理にしても、自分が興味をもった授業に関しては、ぜひ積極的に質問してほしいし、そして質問だけではなくて意見も言うなどして積極的に取り組んでほしいですね。教員の言っていることがおかしいなあと思ったら遠慮なく、「本当にそうなんですか?」、「私は今までこういうふう考えていたのだけれど、これでは違うのでしょうか?」などと授業で積極的に発言することが大事です。教わったことを覚えるだけではなく、「本当にそうなんだろうか?」という疑問を持ち、「こういうことって調べたらおもしろいんじゃないか?」というような問題意識を持つことが大切です。このようなことは、例えば卒業論文に向けた具体的な問題意識にも結びついていきます。

自分が面白いと思ったことには、いろいろな問題意識を持って、積極的に取り組んでいってほしいと思います。

原田 隆郎 先生 (工学部)

「情報処理概論」

受賞に関するご感想を教えてください。

大変嬉しく思います。賞があるのは知っていましたが、どんな基準で選ばれたのか、どんなふうに使われたのかわからなかったもので、そういう意味では突然受賞の知らせが来たのでびっくりしました。これが第一印象です。



学生から非常に高いアンケート評価を受けておられますが、先生ご自身はどんな所が学生に一番評価されたとお感じでしょうか？

学生から高い評価があつて推薦されたとのことですが、授賞式で学長が話された選定理由は15回の授業計画で真新しい面白い企画をしている点を評価したという話でした。ただ学生がその工夫をどのように評価したかについては実際のところわかりません。

これは私の持論ですが、学生になんでこれをやるかをきちんと話すことが大事だと考えています。まずは毎回の授業の中で今日は何をやるのかとか、15回の授業の中で今回はここをやるんだということをきちんと説明するようにしています。私が担当している情報系の授業では、リテラシーなので、基本はインターネットやメールや倫理、ワード、エクセル、パワーポイントです。が、なんでワードをみんな知っているのに教えるのか、なんで情報倫理とかインターネットの使い方とかも1回分やるのかについて、大学はどう考えているかということを学生に話すことにしています。

最後の授業では、学生それぞれが作成したパワーポイントのスライドの審査会を企画しています。それを工夫していると学長からほめていただきましたが、なぜそれをやるのかをも学生に話すようにしています。それは、授業でテクニックやノウハウを教えるだけではなく、他の人のものを見て他の人の見方を勉強することに大きな意義があるということです。人の作品を評価できる、そのいい悪い、または、ここは自分に取り込みたい、…それを考えることが重要で、その機会を持つ、そういった審査会の意味をきちんと話します。学習に対するきちんとした目的意識ができるからこそ、学生が授業を楽しく受けることができているのではないのでしょうか。

その他に授業で大切にされていることはありますか。

90分という講義時間をどう使うかです。毎回毎回必死に考えます。途中で終わったりしたら、1週間空きますので、次への連続性が切れます。また流れるにどのように組み立てれば90分を飽きさせないかを考えます。例えば出席というのはいろんな取り方があると思いますが、出席とすることは結構無駄な時間なのでアンケートとったり、小テストをしたり先週やったものをメールで送らせ、後で送られてきたメールでチェックする。このように出席の取り方を工夫して、飽きさせないよう90分の時間をうまく使えるように、そこにす

ごく神経を使います。

学生の中の習熟度の差にも気を配っております。本年度は66名を教えています、現時点では習熟度の低い学生をターゲットにやろうとしています。そうすると、できる学生が、つまらなさそうにするかもしれませんが、やり方を少し工夫して、前半で基本的なスキルをみんなに教えて、後半はそれを活かして自分たちでテーマ設定し調査させるレポートを出題します。そうすると、できる学生はこちらの課題を一生懸命頑張ります。このように少しメリハリをつけるよう工夫しています。つまり、単純にワードやエクセルなどのスキルを教えるだけでなく、それをどうやって利用するかということを教えるように心がけています。

最後に学生へのメッセージをお願いします。

この授業（情報処理の授業）に関して言えば、学校で教えてもらえるのは、この分野のほんの一部でしょう。15回の授業で絶対に全部教えることはできないので、授業の中でどうしたらここから先、自分で勉強できるか、そこのハウツーと学び取ってほしい。

もちろん大学で情報処理を学ぶわけなので、なんでそれを学ばなければならないかという目的をちゃんと認識して、「自分はここが不得手だなあ」、「インターネットのこういうところがわかっていない」とか、「エクセルに関してはここまではわかったけどここから先はわかっていない」だとか、はっきり自分で認識できていれば、あとで自分で勉強できますから、心配しなくてもいいのではないかと思います。だから自分で勉強できるコツを学んでもらえればと思います。例えば、ワードのバージョンが違ったりするとそれでわからないというのではなくて、ワードでも表計算でも学んだら、あとは自分でマニュアルを読みこなして、そしてそれを自分で使えるようになる、その部分が必要なんですね。そこを学んでいったらいいのではないかと思います。

どの教科でも考えるということ学ぶということが大切だと思います。



お知らせ(理系質問室より)

理系質問室では、理系基礎科目についての質問を教員と指導員が受けています。授業や自習していてわからないことはありませんか? 「この科目をもう少し深く勉強したい」、「勉強の仕方がわからない」などの相談でもかまいません。気軽にそして大いに利用してください。

場 所：共通教育棟1号館1階130室

開室時間：水曜日 12:00～15:00

月・火・木・金 12:00～13:30

学生の声

理系相談室の相談員を経験して

教育学研究科 数学教育専修 2年 渡 邊 和 浩

今回の理系相談室の開設に伴い、その相談員をやらせていただいた。理数系の内容に関する学生の質問や相談を受けることが仕事の内容であったが、質問に答えられないことやうまくアドバイスできないことが多々あった。わかっていたと思っていたところも、質問されて教える立場になると、うまく教えることができなかつたり、自分の理解が本当に正しい理解なのか不安になることがあった。また、答えや公式など知識や情報をただ伝えるだけという教え方では本当の学力は身につかないと考え、なるべく学生自身が考えて納得できるようなアドバイスをするように心がけた。その中で「わかった」「なるほど」という学生の言葉や表情にじかにふれることができ、やりがいを感じることができた。

今回の経験を通じて人に理科や数学を教えるということの難しさと自分の未熟さを改めて痛感した。理科や数学が嫌いな、いわゆる理系離れの中学・高校生が増えていると聞く。1人でも多くの子どもたちに理科や数学のよさやすばらしさを感じてもらい、理科や数学を好きになってもらうことを目標とし、将来立派な数学の教師になるために、まだまだたくさんの努力をしていかなければいけないと感じた。今回、このような経験の機会を与えてくださった関係者の方々、指導して下さった先生方に深く感謝したい。この理系相談室がこれから先も発展していったらいいと思う。

編集後記

- 秋ですね! 茨城県は秋から冬にかけておいしいものがたくさんです。栗、梨、柿に鮫鱈…。秋刀魚をたくさん買ってみんなで秋刀魚を焼いたり、お鍋をするなど、旬の食材を楽しみましょう。栄養もバッチリとれますし、安上がりに学生らしく、秋の味覚をエンジョイしてください。(上田)
- 前学期の成績はいかがでしたか? 前学期を終えて、1年生の皆さんにも「単位」というものが身近に(切迫して?)感じられてきたのではないのでしょうか。みなさんが取った「単位」には、与えた教員の想いも詰まっています。それを持って、どんどん次のステップへ進んでいってください。(梅原)
- 天高く馬肥ゆる秋、食欲の秋、読書の秋、…などなど、秋にはさまざまな形容があります。なぜでしょう? たまにはそんなつまらないことを考えるのもいいかもしれませんね。秋はそんなゆとりをくれる季節かもしれません。さてみなさんは今年、どんな秋にしたいですか?(吉田)

発行日 平成21年10月/発行者 茨城大学 大学教育センター 水戸市文京2-1-1 029(228)8416(学務課教養教育係)